

# 対魔忍世界に四騎士の 力を手に入れた男がい る件

3 よりZEROへ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人と魔族の均衡と調和が乱れた世界。

そんな末法の世にあつて人に仇なす存在を闇に紛れて討つ忍があつた。  
その名を——対魔忍。

そしてその陰に隠れるように、一人の騎士が現れる。

曰く、第二と第四の騎士の代行者。

默示録に記された赤き騎士と青白き騎士を力を受け継ぎ、男は闇を走る。

# 目 次

黙示録の騎士

1

仇敵は追憶に耽り、騎士と混血は西を目指す

廃棄都市に住まう人々・上

40 22



# 黙示録の騎士

日本。

深夜の道路を、バイクが疾走している。

それだけならば、速度を考えなければ普通だろう。

それ程に、そのバイクは速かつた。ホイールどころか車体すら炎を纏っているのだ。  
普通のバイクでは決してないだろう。

だがそれ以上に異様なのは、乗っている男だ。

赤いフードに鎧。左手には巨大な籠手を装着し、背には切つ先が二つに分かれている  
大剣。

フードから前に零れる髪は銀色で、目は白光を放っていた。

眉と額には赤く輝く傷のような文様があり、一目で只者ではないことが伺えるだろ  
う。

そして、男が追つている者たちも普通とは決して言えない存在だ。  
重火器で武装していようとも、その持ち主は人間ではない。  
オーケ。

そう呼ばれる魔物だ。

魔界の最下層生物であり、媚薬の成分が含まれる体液を使い女を発情させ犯すことしか考えないような者たちだが、昨今の人間社会の裏では武装勢力として指折りの存在だとさえ言われている。

しかし。

そんなオーク共が重火器を乱射しても、涼しい様子で追走するバイクに乗った騎士には恐怖の感情は見られない。

腰に手を回し、大型の回転式拳銃を取り出すと即座に応戦する姿には余裕さえ感じられる。

その銃口から発射される無数の弾丸は、あっさりとオーク共が乗るトレーラーのタイヤをバーストさせた。

右に左にと揺れるトレーラーのせいで、ただでさえ当たらない機関銃が更に明後日の方向へと向けられたではないか。

その隙を逃さんとばかりに男は銃を仕舞い、大型手裏剣を取り出し、投擲する。燐光を宿したその手裏剣は狙い違わずにトレーラーの出口付近にいたオーク五体の首を纏めて斬り飛ばした。

血を噴き出し、崩れ落ちる身体。

戻ってきた手裏剣を仕舞い込むと、左手の籠手と同サイズの籠手が右手に装着される。更にその籠手には鎖が巻かれており、先にはアンカーが備え付けられていた。

即座にアンカーは射出され、トレーラーの車体へと打ち込まれた。

そして、男はバイクより飛んだ。

即座に炎上しバイクが地面へと沈むように消えたが、オークたちはそれを見る事はなかつた。

鎖を引き、男がトレーラーのコンテナの上へ落ちてきたからだ。その重力落下エネルギーを一切ロスする事無く、その右腕に装着された巨大な籠手が打ち付けられる。

すると、トレーラーは爆発四散し、停車を余儀なくされた。

辛うじて生き残つたオークもいたが、しかし彼らの不幸は続く。

男が構える大鎌が、紫の燐光を伴つて飛来してくるからだ。

あつさりとその軌道上にいたオーク共はその胴を両断され、その命を散らしていく。問答無用とは正にのことだ。

如何に吠えようとも、罵声を浴びせようとも、男は無言でこちらを殺しに来る。

しかし、そんな最悪の状況において、援軍が現れた。

どうやら雇い主である有名企業の社長が、この男を抹殺する為に援軍を寄越したらしい。

しかも同族であるオークを主体とした百人規模の傭兵の増援。  
これで敵が女ならば、生かして捕らえて斃り者にするが、相手は男だ。さつさと肉塊  
に変えてやればいい。

そんな時だ。

「……なあ、お前ら。四騎士って、知ってるか？」

今迄無言だった男が、口を開いた。

低く、まるで地獄のような声色。

「ああ!? 知らねえよ色物ゴリラ野郎!! 僕らに盾突いて生きていらるると思うんじや  
ねえぞ!!」

仲間が馬鹿にした口調でそう言うと、男は気分を害した様子も無く、語り始めた。

「世界の均衡と調和を乱した者を肅正する存在。それが例え人であれ、魔物であれ、天使  
であれ、悪魔であれ、神であれ——速やかに抹殺するが、默示録の四騎士」

そんな男の横に、炎を纏った大型のバイクが現れる。

「俺自身はそんな大層な代物じやあ無いけどな。その力を借りて いる以上、真似事くら  
いはしなくちゃならねえ」

バイクへと跨り、背の大剣へと手を伸ばす。

右手に握られた大剣が恐ろしい。

ふと、古巣で聞いた御伽噺を思い出した。

その者、赤き騎士。

大剣を振るい、戦争を司る者。

大いなる破滅の一人。

そして——敵対した者は、須らくが滅んだ、と。

「四騎士の代行者たる影シャドウが宣言する」

百人以上いるこちらにアレは、突つ込んでくる気だ。

そして、悉くを殺し尽くすだろう。

理解した。

「死ね」

そして、蹂躪が始まった。

バイクが高速で突つ込み、大剣が振るわれる度に首が飛んだ。

巨大な左手一本で巧みにバイクを操り、縦横無尽に赤の騎士は殺戮を繰り返す。最早虐殺だ。

百人の援軍など、意味のあるものではなかつた。

実際、自分など交差する一瞬に心臓を破壊され、返す刃で胴を横薙ぎに両断された。銃で、手裏剣で、籠手で、大鎌で、大剣で。

ありとあらゆる武装が必殺。

それもそうだろう。

あの騎士は代行者だと言つていたが、それでも騎士だ。  
であれば、自分たちでは逆立ちしたつて勝てないような上位魔族や悪魔とも戦うイカ  
レ野郎なのは明白だろう。騎士によつて殺された上位者の話など枚挙に暇が無いのだ  
から。

そんな危険人物と事を構えた時点で、こちらの敗北——いや虐殺は当然だつた。

ありとあらゆる煩惱に塗れ、女や弱者を食い物にしてきたオーケとして、不自然な  
くらいに穏やかな気持ちで訪れる死を待つていた。

もし、生まれ変わりというのが本当にあるのなら、今度こそ真っ当に生きてみよう。  
あんな騎士に目を付けられるような死に様は二度と御免だ。

そう思いながら、オーケは死んだ。

だからこそ、そのオーケは運が良かつた。

更なる恐怖を知らずに逝けたのだから。

「光栄に思え。怒りの化身を見れるのだから」

その言葉を皮切りに、騎士の身体が光に染まる。

そして、炎によつて形成された巨躯の竜人が現れた。

手にある炎剣によつて斬ると同時に焼き尽くされるオーク共。生きたまま焼かれる。

骨すら残らず塵と消えるのだ。

死体すら残さない。

絶望に満ちた悲鳴が響くが、それ以上に竜人の咆哮が周囲を席捲する。もはや悪徳に救いは無く。

死のみが齋されるのだから。

そして——炎が消え、騎士だけが道路の上に立つていた。

しかし周囲には炎と血の臭いと、車から漏れるオイルの異臭が漂つていた。そう遅くない内に、オイルに引火し爆発するだろう。

背に大剣をマウントした騎士がバイクに再度跨ると、彼の左の籠手から黒い靄が溢れ出た。

それは即座に黒い異形へと姿を変えると、どこか軽快な口調で騎士に話しかけた。

「おいおい相棒。随分と大盤振る舞いだつたじやねえか」

気安い様子で話し掛け、騎士の肩に手を回した。

「今夜はこれでお開きか?」

「いや、そういうじゃない」

アクセルを吹かし、騎士は言う。

「もう一人、報いを受けなければならないヤツがいる」

「……そうかい」

そう言つて、異形——ウォツチャーはその六眼を細めた。

「んじやあ、とつとと行こうぜ。……対魔忍のお嬢ちゃんたちも近付いてきているしな」

「ああ」

その夜、裏で悪事を働いていた某大企業の社長が殺された。

下手人は不明なもの、彼の悪事がリークされたことで関係者は軒並み逮捕される事となつた。しかし他の主犯と呼ばれる者や近しい連中は獄中で死んだ。

様々な噂が流れる中に一つ、こんなモノがあつた。

悪人共は、魔族と繋がつた事で対魔忍に殺された。

しかし、裏の世界ではもう一つの噂も微かに広まつた。

こちらはそれなりに情報通な者たちの間で実しやかに囁かれる程度のモノで、殆ど与太話の類とされていたが。

曰く——社長は、『騎士』によつて殺された。  
均衡と調和を護る黙示録の四騎士。

その代行者が現世にいる事を知る者は少ない。

そして、噂は対魔忍というネームバリューに隠れていく。



沢木探偵社。

それが、俺が今住んでいる建物の名前だ。

名前の通り失せ物から浮気調査、迷った犬猫の捜索まで請け負うどこにでもあるような零細探偵事務所で所長は俺が務めている。

人員は少なく、対魔忍組織を抜けた俺と弟——そしてもう一人とで構成されており、しかしそれでも十分に食つていけるのだからまあ順風満帆と言えるだろう。

そう、これまでは、だ。

「久し振りね——恭介」

目の前にいる幼馴染——井河アサギ。そしてその妹のさくらが俺の事務所を訪ねてきたのだ。

「……対魔忍には関わらない。それが統領殿との約定の筈だが?」

その約定を結んだから俺たちは出奔出来たのだ。

しかしその約定を統領の孫が反故にするとはねえ。

「ええ、そうね。でも——そうしなければならない理由があるの」

キツ目の美人であるアサギがどこか悲しそうで、しかし毅然とした態度で俺にとある資料を見せた。

「これは?」

「甲河の里が、エドワイン・ブラックの組織に襲われるかもしれないって情報を掴んだの」

確かに資料には、ここ最近のブラックの組織——ノマドの動きが記されていた。明らかに隠す気がねえなこりや。

しかしこれは……

「井河が動くにや理由が薄い、か?」

その言葉に頷く二人。

確かにあの爺様なら、この程度の情報じやあ組織を動かすつもりはねえだろうな。  
それ以前に、もしかしたらこの時点で裏で繋がっている可能性もある。

……敢えて火中の栗を拾うつもりはねえだろうな。

数年前の「ふうまの里」討伐で、対魔忍全体のトップに上り詰めたんだ。ここいらで同じくらい古い甲河には消えて貢うつもりか。

「なあ、アサギ。お前さん、俺が忍法が使えないって解つて言つてるか？」

そう訊くとアサギは苦い顔で、

「……ええ。でも貴方は、私でも勝てないくらいに体術に優れているわ」

「それとこれとは別問題だろ。実際、忍法を使われたら俺あ手も足も出んわ」  
救出作戦など不可能だ。

「ええとね、恭兄。そうじやないんだよ」

「オローを入れるようにさくらが今度は口を開いた。

「今回の依頼は、ノマドの戦力分析なんだ」

……驚いた。脳筋集団の対魔忍なのに情報収集とは。

「悔しいけど、私たちじやあ今のノマドには勝てない。それは分かつてゐるんだ」

「ええ。上の人たちは、いつだつて遣り合えば勝てると思つてゐるけど——ブラックは化け物よ」

成程ね。

——つて。

「余計に俺は役立たずじやねえか」

さつき忍法使われたら負けるって言つたばつかだろうが。

「いいえ。今回はそうじやない」

そう言つてアサギは資料の先を読むように促した。

……ふむ。

「つまり、あれか？　お前はこう言いたいの？」

ブラックが甲河の連中と遊んでる間に、ブラックの情報収集をしろ、と。

頷かれる。

「んー……となると、この依頼の発案はお前じやないな。……統領殿か」

情の厚いアサギがこんな仲間を売るような真似をして戦力分析を図るとは思えない。

忍としてはちと甘いが、それが許される程度にはコイツは強い。

「ええ。人を使つても良いし、自分で向かつても良いと言質は得て いるわ」

「で、お姉ちゃんは自分で行くつもりなんだけど自分の眼だけじゃ心配だから、恭兄を

頼つたんだ」

恐らく、統領にはこの件は伏せておくつもりだろう。

あの爺様、自分以外は全て駒とか思つてゐるだらうしな。

「……つまりアサギは見せ札か」

最悪見つかればアサギが派手に暴れて注意を逸らし、その隙に俺が情報を持つて離脱する、と。

「……分かつたよ。で、カネはどれくらい貰えるんだ？」

提示された額は少なく、他に持つていけば門前払いを食らうのは確定だな。

……だがまあ、それでもいいさ。

カネは貰えるところから貰えばいいんだ。

どつかの社長が貯め込んでた裏金とか、な。



甲河の里。

対魔忍の中でも有数の歴史を持ち、甲賀の流れを汲む名門。その里が、壊滅しようとしていた。

下手人は、エドウイン・ブラック。  
ノマドの構成員は殆どが返り討ちになつたが、やはりブラックは別格だ。

ヤツが動く度に忍が死んでいく。

老若男女問わず、次々と。

こりやあ、アカンわ。

つい関西弁が出るくらいに力量は隔絶していた。

それこそ、騎士に匹敵——

「つづ!?

頭痛がした。

なんとなく、これは第二の騎士からの抗議な気がした。

多分、あの程度なら負けん——つて思つてるんだろうな。

まあ、そこは同意する。

魔物や魔族よりも悪魔天使は格上なんだ。

幾ら吸血鬼の始祖とは言えども、不死者殺しの代名詞とも言える四騎士には勝てないだろう。

そう、四騎士には、だ。

俺は所詮代行でしかない。

まあ、ここでドンパチをする必要は無——

「いやあ！　パパ、ママ！　行かないで!!」

少女の悲鳴。

「いいかい、アスカ。お前はここに隠れていなさい」

「そうよ。きつと……きつと迎えに行くわ。だから、静かに隠れているのよ？　出來るわね？」

親子の別れ。

見る限りあの夫婦は手練れだろう。

だが、ブラツクに勝てるとは思えない。

恐らく、鎧袖一触で終わるだろう。

あの男は、それに何の痛痒も感じないだろうさ。

だからだろうか。

「——死に行ぐつもりか」

騎士の殻を纏い、俺は話し掛けた。

「「つ!?」」

咄嗟に背後に娘を庇い、武器を構える夫婦。

「……ガイコツ？」

騎士となつた俺を見て、少女はそう呟いた。

まあ、確かに髑髏の仮面をつけてはいるが。

「如何にも。我是四騎士の代行者、名をシャドウ」

その言葉に夫婦は目を見開いた。僅かではあるが噂はあつたんだ。多分それを知つていたんだろうな。

「つ、つまりキミが、默示録の四騎士の一人……」

「代行だ」と言つただろう。まあ、俺のことは良い。今重要なのはそちらの方だ

火の手が上がり、悲鳴が鳴り響く。

更にはブラックの哄笑。野郎、かなり遊んでやがる。

「……なら、シャドウ君。娘を任せたいんだが、構わないだろうか」

「正気か？」

「ええ」

「どこの馬の骨とも知らん騎士を名乗る変質者に掌中の珠を渡すだと？ 気は確かか

？」

その言葉に、男は苦笑みを浮かべて頷いた。

「腐つても甲河対魔忍の頭首なんだ。仲間が死地に向かつてゐるのに、僕たちだけが逃げるワケにはいかない」

「ならば母親だけでも」

「いいえ。私も腐つても甲河の女、安らかに死ねるとは思つてないわ」

決意は固いようだ。

「……意地よりも優先すべきモノがあると俺は思うがな」

「ああそうさ。僕たちはね、その優先すべきモノの為に戦いに行くんだ」

帰つてこれなくとも、娘の前途を明るく照らす為、か。

だが、

「……断言しよう。貴様らの娘は、確実に貴様らと同じ対魔忍となる。同じように苦し  
み、もがき」

「だけど生きていいけるんでしょう？」

母親が、そう言つた。

「……何を根拠に」

「あら？ 母親だもの。娘を預ける人がどんな人なのか、一目見れば解ります。……貴  
方は、背負つた命を投げ出さない人よ。少なくとも、請われ、願われた事に真摯に向き  
合う人」

「俺が娘を見捨てるとは思わないのか？」  
「ええ、貴方は見捨てないわ」

……参った。

どうしてこうも美人つてのは。

「さて、そろそろ行かなきや」

もう、悲鳴すら聴こえない。恐らく生存者はここにいる三人のみ。

そして、もう直ぐ独りになる。

「……アスカ」

泣きじやくる娘を優しく抱き締め、父は言う。

「愛してゐる」

そして母は、精一杯の愛情を込めて、

「生きて」

そう言い残して、死地へと駆けて行つた。

二つの影が遠ざかるのを見送つていると、ウオツチャードが現れて俺に訊く。  
「で、どうすんだ？」

「……逃がすしかないだろう。死人の遺言くらい、聞いてやらんとな」

そう言つてアスカと呼ばれた娘の肩に手を伸ばそうとして——掴まれた。

「お願ひ!!」

涙で濡れた瞳。

その奥にあるのは、強い意志。

「パパとママを助けて!!」

遠くで剣戟の音が聞こえる。その連撃は鬼気迫るモノがあり、ブラックの哄笑は更に拍車がかかった。

「……今の俺では、あの男には勝てん。それでもか?」

ここで逃げれば、確かに安全に娘は死地を脱出出来る。

だが、

「いいもん! 私、隠れてる!! だからお願ひ……パパとママを!!」  
「…………期待はするなよ」

碧炎のバイクを召喚し、俺は剣戟音のする場所へと走り出した。  
間に合わないと知りながら。

結論を言えば、俺は間に合わなかつた。

二人は死に、アサギも見つかりそうになり、仕方なく俺（騎士）が出張る羽目になつたが、まあ五体満足で逃げ出せたのは僥倖つてもんだろう。

アイツの腕をぶつた斬つて、腹を搔つ捌いてやつたが——まあ程なく復活するだろうさ。

そのせいで野郎にロツクオンされたが、まあ仕方ない。……仕方無いさ（震え声）。  
で、我が沢木探偵社には居候が増えた。

名を、甲河アスカ。

甲河対魔忍最後の一人。

そして、俺たちの家族として。

浩介と似た年頃だから、打ち解けるのは随分早かつたけどな。

今は二人して学校に通つている。裏社会との繋がりのない、真っ当で普通の学校だ。  
恐らく近い将来、あの子は対魔忍としての修行をつけるようになるだろう。  
そして、世界の闇を相手に戦つていく。

であるのならば、無残に犯され、踏み躡られる事のない力を与えてやらねば。

「忙しくなりそうだな、相棒」

「……ああ」

傍らに佇むウオツチャードの言葉に頷きながら、俺は新聞をめくる。

こうして、俺とエドワイン・ブラックの間には因縁が結ばれた。

それがどんな未来を描くかは、まだ解らない。

しかし、俺は後悔しない。

きっと俺はヤツを殺す。

黙示録の四騎士の代行者ではなく、一人の沢木恭介という——やられ役のNTR要員でしかない俺がだ。

きっとそれは、かなり痛快な物語になるだろう。

## 仇敵は追憶に耽り、騎士と混血は西を目指す

エドウイン・ブラックは、吸血鬼だ。

それも始祖と呼ばれる原初に生まれた吸血鬼の一人であつた。そこから戯れに他者に血を与え、女と交わり、——種族と呼べる程に吸血鬼は増えた。

しかし魔界において吸血鬼は最上位の存在ではない。精々が中堅といったところだろうか。

始祖であるブラックは魔界でも強者ではあるが、他の吸血鬼はそうではない。故に彼らは版図を広げた。異界である人界にすら王国を築いたのである。生まれが比較的脆弱であるが故に。彼らはその人よりも長いその生涯を費やして、安穩と生きれる地盤を組み上げたのだ。

しかし、生まれながらの強者であるブラックは、己の生涯に飽いていた。  
女も、酒も、美食も。

こと悦楽を貪り、耽溺した。そして全てに飽きてしまつたのだ。  
長い永い、まるで生きながらに腐り果てるかのような諦念の中、彼は最後の悦楽を見出した。

闘争。

強者との真っ向勝負。

血沸き、肉躍る。

そう形容されるような闘争こそ、彼の中に残つた最後の愉しみであつた。だから、その為ならなんだつてした。

甲河対魔忍の里の襲撃もそれが理由だ。

里一つ壊滅させれば、他の対魔忍共は強制的に自分と敵対する。

米連のように利用する間柄では、寝首を搔こうするのが精々だ。しかし明確に敵対すれば、その悲劇を土壤に愉しめるような強者が生まれるだろう。そう考えた故の蛮行。その結果。

彼は凄腕の対魔忍夫婦によつて腕を傷付けられ、その後に闘つた代行騎士の刃によつて左腕を斬り飛ばされ、腹を真横に搔つ捌かれた。

「失礼します」

高層ビルの最上階。

夜景の見えるガラス張りの豪奢な部屋で寛いでいたブラックに、緊張した面持ちの美

女が近付く。

名を、甲河臘。

先の甲河襲撃の折に手に入れた駒だ。

赤いスリップドレスに身を包んだ彼女は、人間であつたがその忠誠心はブラックに注がれ、同族である人間など家畜としか見ていない。

しかし昨今では、同じ人間を家畜や奴隸と見做す人間は多い。……それが如何なる理由であろうとも。

「……ああ、臘か」

そう呟き、ブラックは風呂上りのバスローブ姿でリクライニングチェアに座り、肘や腹の傷跡をなぞり続ける。

サイドテーブルに置いてある高級なワインやチーズには一切手を付けずに、だ。

「ブラック様、その……随分とご機嫌が良いようですが……」

「ああ、お前は知らんのだつたな。……甲河襲撃の折、手練れの対魔忍と戦つてな。随分と楽しませてくれたが、呆気なく壊れてしまつてな。ある程度満足したと思つた矢先に、これだ」

どこか自慢気に腕を見せびらかす。二の腕に走る傷は、腕を一周している。見る者が見れば、それが斬り飛ばされたものだと解るだろう。

「分かるか？　たかが人間が、この私の腕を傷付け、更に騎士の力を得ただけの人間に、腕を落とされ、腹を裂かれたのだ」

ある意味、ブラツクはヒトという種を好んでいた。

「では、その愚か者の始末は私にお任せを「許さん」……は？」

主の為にその愚かで矮小な存在を抹殺せんと決意した朧を、しかしブラツクは許さなかつた。

「アレは、私の獲物だ。誰にも手は出させん」

ゆらり、と。

ブラツクの身体から立ち昇るオーラが、物理的な圧力を持つて朧を圧倒する。  
彼は始祖の吸血鬼だ。

だが、それだけではない。

彼には、『その先』があつた。

始祖であるが故か。

それとも長い年月によつて形成されたのか。

その圧を受け、朧は即座に跪いた。

「しょ、承知しました」

恐怖の余りに震える彼女を無視し、ブラツクはあの夜を思い返す。

素晴らしい戦いだつた。

対魔忍の夫婦と思われる男女との短くも密度ある攻防。

持てる技量の全てを発揮し、この命を絶たんと襲い掛かつてくるのだ。

その執念は凄まじく、避け損なつた左腕に深い傷を刻んだ程だつた。

お陰で長く楽しむつもりが、力加減を間違えて即座に殺してしまつた。

だが、そんな自分を更に楽しませてくれたのが代行騎士だ。

髑髏の仮面を被つた黒髪の男は、忍装束と軽装の鎧をミックスさせたような服を着込み、何も言わずにその得物である二振りの片手鎌で左腕を斬り飛ばした。呆気に取られた。

この私が、何も出来ずに腕を奪われた。

故に、嘲笑は激しさを増した。

左腕から吹き出る血を固め、即席の腕へと変貌させ、ブラツクは騎士へと襲い掛かつた。

火花。

硬質化した腕と鎌の刃が高速で打ち合う事で生み出されるそれは、無数の星となつて周囲を彩つた。

世界的多国籍複合企業（コングロマリット）であるノマド、その支配者の地位に君臨するブラックはその立

場上、様々な芸術に触れる事が多かつた。

しかし。

その彼をしてあの火花は至高の芸術である、と断言する代物だつた。

弱者が強者を屠るのではない。

強者が弱者を踏み躡るのではない。

実力の拮抗する者同士のみにしか赦されない、一瞬の芸術。

今迄、蹂躪しか経験していないブラックにとつて、それは何物にも代え難い体験だつた。

「叶うモノなら……もう一度、あの男と闘いたいものだ」

万感の籠つたエドワイン・ブラックの呟き。

しかし朧はその言葉に返事が出来ない。したい、したくないのではなく、出来ないの

だ。

喜悦の儘に進るオーラ。

魔界の生物に比べて圧倒的な弱者である人間にとつて毒でしかないのだから。無論、オーラのような最下層生物でも同様ではあるが。

それ故に、不用意に入つてきた人間の部下はそのオーラに當てられ死んでしまつた。朧が無事なのは、対魔忍として鍛えられた肉体を有していたからに過ぎない。……その魂だけでは、耐える事無く死んでいただろう。

「ああ、いかんな。進りが抑えきれぬ」

この血の滾り、生半では收まりがつかない。

かと言つて、今の人界で騒ぎを起こせば詰まらない鬭争しか引き起こせないのは明白。女では少々足りない。であるのならば――

「朧」

オーラを少し抑え、跪く部下へ声をかける。

「――は」

短く、それだけしか返せない彼女を見て、軽く失望を眼に浮かべながら告げる。  
「私はこれより古巣に顔を出してくる。留守の間の指揮は貴様かイングリッドに任せることにする

ぞ」

返答を待たず、魔術にて一瞬で着替えた吸血鬼の帝王は消える。残るのは、震える女と物言わぬ死体が一つ。

その日。

魔界の一角、絶えず複数の勢力がぶつかり合う紛争地帯が壊滅した。文字通りの壊滅。

生存者は皆無。

どの勢力も勝者にならず、その骸を荒地に晒す事となつた。

しかし間を置かずに別勢力がその地域の支配権を得ようと進出し、同じ思惑の別勢力とかち合い、紛争は継続される。

飢えを癒す餌は、絶えず補充されるのである。

そして、井河祖父より下された指令によりアサギの手によつて隴は殺され、プラックが帰還するまでの数か月間——ノマドは機能不全に陥つた。

我が城である沢木探偵社は、都心部から離れた郊外の一角に存在している。

仕事の関係で知り合つた外道共の裏金やら隠し財産を奪——心が広い善意溢れる提供のお陰で三階建てのレトロなビルを購入する事が出来たからだ。

「さて」

一階は事務所になつており仕事の依頼はここで受ける。

二階はダイニング兼リビングと俺の部屋があり、三階には浩介とアスカの自室があつた。

無論空き部屋や物置として使つている部屋もあるが今は置いておこう。

かつて俺や浩介が暮らしていた関東圏の山間部にある五車町。あそこは天然の訓練施設でもあつた。

まあ、忍である以上山間部に居を構えているのは当然と言えば当然なのだが。

しかし現在の俺たちは田舎から都会へと転居した身の上だ。郊外とは言えどもな。  
それ故に、問題もあつた。

「……訓練場、か」

浩介やアスカが対魔忍となるかどうかは兎も角、鍛錬の場は必要だ。

しかし外部に気取られるような場所は論外。隠蔽可能でちょっととやそつとじや壊れないような施設など——出来る筈もない。

と言うよりも現在の政府関係者の八割以上が外部組織との紐付きという救いようの無さだ。

どこから情報が漏れて襲撃されるか解ったものじやない。

である以上、必然的に頼るのは裏の連中になる。

となるならば頼れる種族は必然的に決まつてくるな。

「……創造者<sup>(メイカ)</sup>に頼るしかない、か」

始祖は星すら生み出したとされる物<sup>ものづく</sup>創造りに特化した種族だ。人よりもデカく器用な連中と聞く。

石に命を吹き込むゴーレム創造は、この種族から齋されたらしい。

はつきり言えばかなりマイナーな種族だ。

実際こいつらは引き籠り氣味で、外部との接触は殆ど無い。長命種の中でも古い歴史

エルダ

を持つせいか、自分たちの世界以外には余り出歩かないのが実情だ。

だが変り者つてのはどこにでもいるものだ。

確か、アミダハラに隠れ住んでるつて話だつたな。

「……行ってみるか」

アミダハラは近畿地方の近海にある人工島で、色々あつて裏の連中の拠点になつてしまつた場所の一つだ。

まあ、言つてしまえば政府の計画が頓挫し、廃棄される所を連中が搔つ攫つていったようなものだしな。……寧ろ東京キングダムつつー前例を考えれば、そういう連中を「隔離」する思惑もあつたかもしけん。

そして今は対魔忍とは違う組織である魔術師連合の支配地域だ。

ある種の密約が政府との間に結ばれていても俺は驚かん。

しかし、行くとなると長丁場を覚悟せにやならんな。

幸い緊急性の高い依頼は無いし、引き受けている浮気調査もあと二、三件だ。多分来週には動けるだろうな。

そうと決まれば——

「ウオツチャ一、二人を呼んできてくれ」

「どうした相棒？　何か悪い話でもすんのか？」

「さて、どうだろうな……アミダハラにちよつくり行く必要が出来たってだけだ」

「アミダハラつつたら、廃都の一つか」

「そうだな。東京地下のヨミハラ、人工島の東京キングダムと同じ悪党共の巣窟だ」

「目的は？」

「創造者の搜索」

「長命種か。連中は見つけ難いって話だ。それこそ異界の門を開いて、連中の世界に行つた方が早いんじやねえか？」

「無茶言うな。生命の樹を見つけるのがどれだけ大変か知らんワケじやねえだろ」

「クロウファーザーに頼めばいいじやねえか」

「あの爺様は苦手なんだよ」

まあ、いいけどよ。

そう言つてウォツチャヤーは二人を呼びに行つてくれた。

情報にあるオリジナルよりもかなり融通が効くなあアイツ。

「と、言うワケでちとアミダハラに出向く事になつた」

「どんな理由よ」

最近同居する事になつたアスカがツッコむ。

「今度はアミダハラかあ。兄ちゃん、大丈夫？ 島、沈めてこないよね？」

「失敬な。赤い騎士の力を制限無しで使えばやれるだろうけど、其処ら辺の分別はあるつもりだぞ」

「無かつたら沈めるのね」

耳を塞いで聴こえないフリ。

「……とまあ、冗談はさておき」

「本当に冗談？」

「さておき」

氣を取り直して本題へ。

「まあ、そういうつたワケで俺は来週辺りで近畿行きなんで二人は留守番になります」

「ええ～」

「……もう」

連れて行つて貰えると思つていたようだが、普通に考えて異能も発現していないような子供を連れていくような場所じやねえわな。

「約束は覚えてるな？」

「……一人ともちゃんと出掛ける時は鍵を忘れない」

「携帯電話は机身離さず持つておく」

「……危ない人が来たら直ぐに隣のアパートの兵衛おじいちゃんに会いに行く」

「危険なトコには行かない、立ち寄らない」

「よし」

若干不機嫌そうなアスカは心配だが、まあその辺は浩介がなんとかしてくれるだろう。どうにもこの娘はおませさんだからな。弟分のお願いには弱いみたいだ。

隣の連中には、少し気に掛けるように言つとけば大丈夫だろう。

爺さんには近畿にある有名酒造の酒でも送ればいいか。

かつて心願寺紅しんがんじくろいという名の対魔忍がいた。

過日、井河と甲河によつて滅ぼされた「ふうま」一族に所属する頭目の一人であつたが、生まれにより疎まれ蔑まれ、そして敵による凄惨な凌辱の果てに吸血鬼としての己を受け入れたヴァンパイアハーフの少女。

白く美しい肌は褐色へと変貌し、金の髪と相まって異国人風の容貌を際立たせていた。

彼女は部下である槇島まきしまあやめと共に下野し、ダンピールとして生きていた。仇敵が支配する東京地下都市ヨミハラで。

「ええと……あやめ？」

「はい、どうしました紅さま」

あやめが纏めた資料を見ながら紅は、

「ふうまが壊滅したのはどうでもいいんだが……弾正の息子が行方不明っていうのは？」

「ああ、その事ですか？」

あやめも同じ資料を捲りながら説明を続ける。

どちらも古巣には余り興味が無いようだつた。余り境遇が良くなかったのだから当然だらう。

「うーん……弾正の息子と使用人の娘が生死不明なんですよねえ。あの井河と甲河の合同作戦ですよ？ ふうま八将を始め殆どが死んだつて聞いてます。……弾正は逃げたらしいんですけど」

「……そう、か。こちらに来ると思うか？」

「どうでしよう？　流石に弾正は無理じゃないかと。息子さんの方が可能性はあるんじゃないですかねえ」

彼女たちの推測は当たつていた。

弾正の息子は、確かにヨミハラに生活拠点を移す事も考えていたのだから。

しかし。

彼らはヨミハラにはいない。

姉であり従者である彼女の身を案じればこそ、彼はある男を頼つた。  
結果、今の彼らの拠点はどこぞのアパートにあつた。

「——んう」

突然、あやめが悩まし気な声を上げた。

「あやめ？」

「あ、だいじょうぶでしゅよお……」

赤く頬を染めた部下の様子に、紅はその整つた眉をしかめた。

「……血と魔力が足りないみたいだな」

「ええ。でもお、無関係な人の血は吸いたくないって言うかあ」

彼女は、かつて部下であつた男の裏切りにより感度を数千倍に引き上げられていた。  
それ故に、魔力を用いて感度を低下させていたのである。

しかし、吸血鬼の魔力は血に依存する。吸血行為をしなければ魔力は消費される。人間より転化したのならば猶更だ。

「……いつそ、アミダハラに感度を戻せる魔女でも捜しに行こうか？」

ぽつり、と紅がそう呟いた瞬間。  
きらりとあやめの眼が光った。

「旅行ですか!?」

発情とは別の意味で頬を紅潮させた彼女は、即座に主に詰め寄つた。興奮のせいか、

艶やかでウェーブの入った髪が蠢いているように見える。

「うえ!? いやまあ、確かにそう言わさればそうだけど……」

「やつたー!!」

元気いっぱいな様子ではしゃぐあやめ。

テンションが上昇するような事を愛する紅自身から告げられたことで、発情は鳴りを潜めたようだ。

紅は密かに息を吐いた。

彼女が自分を慕うのは解る。しかし、発情の解消として自分と寝ようとするのは——  
「……ん?」

ふと、鍛えられた直感が疼いた。

——アミダハラの地にて、何かが起きる。

不吉な予感。

そしてそれ以上に、誰かと出逢う予感。  
きっとそれは、憎い仇ではない。

「楽しみですね、紅さま！」

「——うん。そうだね」

きっと、自分たちの人生には今迄無かつた出逢いだろう。

「楽しみだ」

そして——彼女たちは魔女と、騎士に出逢う。

# 廃棄都市に住まう面々・上

その日。

奴隸商人である壯年の男は、近年稀な程の不幸に遭つた己が身を嘆いていた。大陸や半島からの武装難民——食い詰め者や、工作員たちが襲つてくるのはまあい。比較的いつものことだ。

しかし。

それとは別に魔界の生物が襲い掛かっているではないか。

偶發的に開いた魔界の門の先に魔獸の巣があつたらしく、魔獸や自我を持つ魔物が門を通つて人界に侵入してきたらしい。

更に、正体不明の武装集団すらこの乱戦に参加する始末。

まさしく大混戦である。

自分たち以外は全て敵。

そう言わんばかりだつた。

お陰で外からやつてきた馬鹿なガキ共を攫つてきたというのに、その殆どが死んでしまつた。

生きているのもいるが、半笑いで現実を直視出来ていないうようだ。

そんな時だ。

黒髪の美女が、トランクケースを片手にこちらに歩いてくるのが見えた。  
ああ、ヤツだ。

一筋の光明が見えた。

声を掛けようとした瞬間——激突音が響き渡った。

咄嗟に、殆どの者がその激突音と衝撃によつて動けなくなつた。  
男も身体を丸めて身を護ろうとした。

暫くして。

充满する粉塵。

その向こうに、巨大な槍が見えた。

あれが原因なのだろう。

であれば——それをここへ投げ、否、打ち込んだ者がいる。

——いた。

斜めに刺さつた巨槍の柄へ。

着地した男——らしき影。

月明かりに照らされ、男の貌が見えた。

髑髏の仮面に覆われた貌が。

その奥に光る橙色の眼が、周囲を睥睨する。

バランスの悪い柄に立っていると言うのに、恐ろしく自然体だ。

その身体を支える槍がまるで幻想のように搔き消える。

音も無く着地する仮面の男は、

「——まあ、全員死んでも構わんか」

そう嘯き、腰にマウントされていた武器——鎌を手に取つた。

如何なるギミックか、手に取つた瞬間にその折り畳まれていた鎌の刃が起き、男から殺気が溢れる。

奇妙な持ち方だつた。

逆手持ち。

類似する持ち方を敢えて例えるなら、トンファーの持ち方に近いだろう。

しかし、堂に入つてゐる。

ふと、あの小憎たらしい魔女と似たような雰囲気を感じた。  
いや——恐ろしさという点ではこちらが上だ。

「……うわあ」

ふと、近くにやつて来た知り合いの魔女・アンネローゼの持つトランクが声を発した。  
その余りに嫌そうな声に持ち主である彼女が反応する。

「なに、ミチコ。あの男を知つてゐるの?」

「知つてゐるわ。あの男つていうか、あの男に”力”を与えた方をだけどね」

「誰?」

「黙示録の四騎士つて、知つてゐる?」

「ええ」

「アレがそうよ。中身は違うっぽいけど

「アレが——?」

「で、アイツの纏つているのが第四の騎士。四騎士のリーダー格で長兄。二つ名や悪名  
なんて腐る程あるわ。『収穫者』とか『同族殺し』とかね。そして——『死』そのものと  
呼ばれてるわ」

成程、そりやあおつかない。

「噂じやあ、上級悪魔すら殺した事があるつて話よ。まあ、あの男にそれが出来るとは思

わないけど……似た事は出来るでしようよ」

そうやつて話をしている間にも、仮面の男は魔物や魔獣、武装難民や兵隊共を殺して回っている。

首を刎ね飛ばされ、胴を、腹を、分割されていく。  
最早逃げる事さえ不可能だろう。

「待てい!!」

そんな時だ。

大柄な男が、刀を抜いて叫んだ。和装を着込み、白髪を短く刈り込んだ額には一文字の傷が入っている。

見るからに一端の武芸者だと全身で主張しているような男だ。

その男は、依頼人である武装難民たちが死んだ事を気にせず、ただ仮面の騎士に向かつて吠えた。

「貴様がどこの手の者かなどは最早訊かん!　しかし、その技、その身のこなし——ひとつひとかど廉の達人とお見受けする!!」

そんな事、一目見ただけで解るだろうに。

奴隸商人はそう思うものの、白髪の男の気迫に呑まれて言葉を発せられない。  
「立ち会えい!!」

顔の横に刀を構え、吠えた。

その言葉を受けて男は、動きを止める。

「……示現流。いや、その流れを汲む亜流か」

順手に持ち替えていた鎌を再度逆手へと戻す。

「生憎と、こちらは無手勝流だ。——口上はいるか？」

「無論!!」

そう叫んで、剣士は先に宣った。

「我が名は魔示現流開祖——阿傍！」

その言葉と共に、男は変貌する。

牛頭人身の魔物に。どうやらアレが正体のようだ。

「黙示の四騎士が代行——シャドウだ」

先程までの阿鼻叫喚が嘘のように静まり返つた。……まあ、殆どが死んでいるからだが。

「——いざ」

「……尋常に」

誰もが動かない二人を固唾を飲んで見守る。  
しかし。

「——つ

ガキが何かを言おうとした。

その瞬間、

——!!

「キエエエエエエエエエエエエエエエツ!!」

「——ツ!!」

二人は動いた。

——まあ、私もね。魔女である前に、一端の剣士のつもりなのよね。

後日、店のカウンターでグラスの中の酒を転がしながら、魔女・アンネローゼは嘯いた。

あの時の戦闘で何が起こったのかを奴隸商人であり、バーのマスターである親父が知りたかつたので訊ねたのだ。

——断言してもいいわ。あの坊やが何に気付いたのかは兎も角、先に動いたのは——えっと、阿呆、だつけ。ソイツだつた。

最早名前すらも曖昧になつてゐるが、あの程度の死んだ男を忘れないでいるのは、相対していた男の技の冴えが常軌を逸して、いたからだ。

——シャドウの方は、逆手二刀流の鎌。はつきり言つてどうすればあの体勢から、あんな速度で得物を振れるのか私でも解らないわ。

交差は一瞬。

しかし、その刃が先に届いたのは——騎士だつた。

残像すら残さない神速にて、牛頭の魔物は首と胴を両断された。

——見事。

そんな言葉を遺して、魔物は息絶えた。

魔物とは言えど、力量が伴つておらずとも、しかしその最期は武人として上等な物だつたと言えるだろう。

一騎打ちの果てに散る事は、ある種武芸者にとつては誉れでもあるからだ。  
——でも、なんだつたのかしらね？

聞けば、彼女は何らかの勘に導かれてあの場へ赴いたのだと言う。  
しかし向かつてみれば死屍累々の地獄絵図。

生き残つてゐる少年が『そう』かと思つたが、それも違つたらしい。

そこに居合わせた奴隸として連れてこられた少年は、何故だか魔術の才がある事が判

明し、今はアミダハラどころか世界的にも名高い魔女であるノイ・イーズレーンの元で魔術師として研鑽を積んでいる。

奴隸協会に登録する前ではあつたが、彼はアミダハラという土地の一帯ラインを超えて、一定の時間を超過したせいで、本土では既に死亡者として処理されているだろう。外部との連絡を取らない時点で観光客であろうとも死亡認定されるくらいには、この人 工島は魔境だつた。

つまり彼は、現状裏でしか生きていけなくなつたのだ。

——不死者としての才能があるのかも、つて思つたけど……違つたのよねえ。私の勘も鈍つたかしら？

結論を述べれば——彼女の勘は当たつていた。

アンネローゼはその少年、たちばなりくろう 橘 陸郎との縁を辿つてあの場へと現れたのだ。

彼は人よりも温和で、優しく、そして工口かつた。あの年代ならば当たり前ではあつたが、しかしそれこそが不死者としての素質だつた。

しかし少年は、眼前で死の颶風となつた騎士の姿に目を奪われた。

脅威を、理不尽を、悪意を蹴散らすその姿に憧れたのだ。

それこそ、己の起源を書き換える程に。

あの日、あの場所は、陸郎にとつてターニングポイントでもあつたのだ。

魔女の不死者として生きるか、人間として死ぬか…………魔術師として覚醒するか。  
しかし前者二つの可能性に比べて、後者の確立は驚く程に小さかつた。  
その覚醒を後押ししたのが、代行騎士であるシャドウだったのである。

●  
ここは、魔法堂。

アミダハラに存在する土産物屋で、観光客相手の商売をしている。

その店主であるノイ・イーズレーンは、店の地下にある修行場にて穏やかな表情を浮かべて、座禅を組んでいる少年を見遣っている。

魔法で動く座椅子に座り、茶を飲みながらではあるものの――弟子に注視する視線には熟練の魔術師の気配が感じられた。

「…………」

未熟ながら静謐な魔力が、彼から漂つてくる。質も量も一端の魔術師と言えるだろう。

半年という修行の短さからすれば、この成長速度は異常とも言えた。恐らく世の魔術

関連の指導者共が知れば、贅を噛んで悔しがるだろう。

幾ら默示録の騎士の戦闘に巻き込まれ、己が起源を無意識に書き換えたとは言えども、これ程の熱意を持つて魔術を学ぶ少年は稀だからだ。

彼女はその類稀なる観察眼と占術にて、解っていた。

騎士の来訪によつて、アミダハラの運命が変わつた事を。

同時に——より過酷な未来が到来する事も、彼女は知つていた。

そのキーマンの一人が、最も新しい弟子だと言う事も。

「リクちゃん、其処ら邊でいいよ」

弟子ではあるものの、孫以上に歳が離れている陸郎だ。アンネローゼよりも年下なのだ。

ついつい可愛がつてしまふ。

どうしても甘くなるのは人としての性質と言える。……且つての弟子たちが見れば

恐怖に慄くか、羨ましさに怒り狂うだろうが。

「じゃあ……今日は、鍊金術について教えようか」

「鍊金術、ですか？ 先生」

魔術の修行の際、陸郎はノイを先生と呼ぶ。

その純朴な呼び方もまた彼女を喜ばせる要因になつてゐるのだが、彼は気付いていなかつた。

「鍊金術の本懐は覚えているかい？」

「ええつと……不老不死になる、でしたつけ？」

実際には、不老不死となり、無限の時間を使つて研究を続ける事だ。だが、手段と目的が反転する事などよくある事だ。

昨今の鍊金術師は、その大多数が不老不死を目指していると言つていい。

「そうだね。なら、鍊金術師が不老不死になろうとする方法は？」

「……賢者の石を精製し、取り込むんでしたつけ？」

「そうだねえ。だけどそれは疑似的な不老不死でしかないのさ。膨大な魔力に物を言わせての力技だよ」

いづれ歪みが出るのは当然だと彼女は言う。

賢者の石。

実在すら疑問視されるような超が付く秘宝だが、どうやらこの師匠はその所在を掴んでいるらしい。

無尽蔵の魔力を生み出せるそれを血眼で探し回る存在は多い。もし触りでも知つてしまえば、その者は背中を気にして生きていかなければならなく

なる。……そうじやなくとも、狙われる要因があり過ぎる陸郎だ。これ以上の負担は御免被りたい。

故に、彼は真剣に魔術の修行を続ける。

命が掛かっているのだ。学生時代のような甘えた事を言つていれば、即座に死ぬのだから。

そんな時だ。

「婆様、いるかい？」

そんな声が聞こえてきた。

聞き覚えのある声。

最近よくアミダハラ来るようになつた”外”の探偵——沢木恭介の声だ。

「おやおや、アンタかい。探偵の坊や」

地下の「勉強部屋」から上がつてきたノイが気安そうにそう声を掛ける。  
格子柄のシャツに黒い無地のジャケットを羽織る男がそれに応える。

「三日ぶりですね、恭介さん」

遅れて上がってきた陸郎も男がいる事に驚いていた。

定住せざるを得ない自分とは違い、彼は頻繁にアミダハラに入つては出ていく。恐らく非正規のルートで出入りしているのだろう。正規ルートでアミダハラに入つたせいで死亡が認定されてしまつた過去の自分を思い返し、なんとも苦い感情が浮かぶ。

鋭い眼と引き絞つた口元をした男が、その口唇を緩めて少年に向かつて手を挙げた。薄く笑つたのだろうか。

「よう、少年。元気でやつてるか？」

「……あはは。まあ、なんとか」

「いやいや、こんな魔窟で死なずに魔術師として修行出来る時点でお前さんは運が良いよ」

半年前。

あの惨劇の夜。命辛々に生き残つた橘陸郎は、流される儘にアミダハラの内部へと流れてしまつた。生き残つた連中の殆どが、そこに拠点を構えていたからだ。

どこか不可解そうな表情を浮かべたアンネローゼという女性に連れられて、あれよあれよと言う間にこの魔法堂へと案内されたのである。

……そこからは早かつた。

店主であるノイは、一目で陸郎に魔術の才能がある事を見抜き、その特性が希少であると告げたのである。

このままでは”外”であろうとも、遅かれ早かれ命を落とす。  
そう言われた。

死の恐怖を味わつた直後だつた陸郎は、恥も外聞も捨てて、ノイに縋りついた。  
その結果が、半年に渡る直弟子生活である。

穏やかに二人と会話を続けながら恭介は思う。

どうやらノイは、弟子の性根を心底から魔術師にするつもりは無かつたようだ。  
普通の感性のまま、魔術師として仕上げるつもりらしい。

少しの受け答え。

それだけで彼が普通の少年のままだと分かつた。

魔術に関する心構えやあり方、それらは生来の気質を歪める事も多い。

だからこそ彼女は、弟子である陸郎に魔術師と染まらぬように、丁寧に教育を施して  
いる。

「ああ、そうだ。リクちゃん。今日の課題をまだ伝えてなかつたね」  
ふいに思い出した様子で、ノイは言う。

「今日は”浮遊霊との対話と交渉”をやつて貰うよ」

「うえ!? 浮遊霊ですかあ」

陸郎は少しだけ身を引く。

まあ、一度浮遊霊に身体を乗つ取られかければそうもなるだろう。  
しかし、

「死靈術に才能があるのに靈が苦手のままじやあいけないからねえ」

ノイはあつけらかんとそう言つた。

死靈術を修めている魔術師は一定数いるが、しかしその才能が突出している者はそう  
多くはない。

陸郎の秘めたる才能の一つに、類稀なる死靈術への適正があつた。

それこそ魔術師が何年もの研鑽を積んで、漸く靈を物質化させられるのだが、彼は  
あつさりとそれをやり遂げた。

普通は死体や無機物、ないし生身の生物に憑依させなければ現世に干渉させられな  
い。これだけでも陸郎が稀有な逸材だと解るだろう。  
「……分かりました。取り合えず装備取つてきます」

陸郎は項垂れた様子でトボトボと自室へ戻つていく。

丸腰でアミダハラを歩くなど、自殺志願者でしかない。その程度の自衛ならば出来て当然なのだ。寧ろ、不死者となつた陸郎の方が危機感が無かつただろう。文字通り死がないのだから。

無意識の内に危機感を持つて生きるのが当たり前になつてゐるようだ。

「……ふむ」

頬に手を添え、恭介はその鋭い眼を細める。

「……氣イ使つて貰つたかい？」

「なに、構いやしないよ。リクちゃんにはまだ早い話題だからね」

恭介の言葉にノイは手をヒラヒラと振つて応えた。

「それで？ 見つかつたのかい、創造者は？」

「いいや。情報屋使つて見つけられるようなモンでもないしな。地道に足で稼ぐよ」

こういつた所が探偵として食つてゐる男の矜持だつた。情報は鮮度が命だと知つており、その為には素早く動かなければならぬのだから。

実際、裏の情報屋でも長命種がアミダハラに滯在してゐる事を知る者は皆無なのだ。

知つていたのは二人だけ。

ノイと、ある商人だけが創造者がいる事を感じ取つてゐたのである。

その商人の名は、ヴァルグリムと言つた。  
対価を払えば様々なモノを売り買いする商人であり、下級とは言え、魔物とは一線を  
画す——悪魔だ。



時間は少し遡る。

人気のない路地裏を歩く恭介。

別段何の気負いも不安も感じない様子で、その表情も凧いでいる。  
見る者が見れば、その男が一端の強者であると解るだろう。  
だが、そうでない者もいる。

「ひひひひ。おい兄ちゃん、大人しく——え？」

暗がりから現れた、大振りのナイフを舐めながら脅す男。  
しかし言い終わる前に、髑髏が刀身に装飾された大剣が真っ直ぐに突き出されて、そ  
の男の首が宙を舞つた。

恭介が、四騎士より授けられた能力の一つに、見た者の「罪業」を判別する『眼』が備わっていたからだ。

殺人、人身売買、売春斡旋、奴隸娼婦の製造——まだ人通りにいれば殺さなかつた程度の罪だが、出遭つた場所が悪かつた。怨み辛みを買つてはいるようだし、殺すつもりなのは殺気を発していたのですぐ解つた。

そうである以上、手加減する意味は無い。

壁に所々ある赤い染みは、ここでは殺人はかなり頻繁に発生しているイベントの一つでしかない事を物語つてゐる。この男によつて飛び散つた血痕もあるのだから。

首の無くなつた男が倒れるよりも早く、恭介は大剣を送還する。

遠くから物音が聞こえてきた。人の足音だ。

どうやら鼻の良いヤツが金蔓が出来たの事に気付いたらしい。

この都市では、死体だつてそれ相応の値段で取引される。

人界魔界問わない麻薬漬けの死体であろうとも、売れば力ネになるのだ。

だから、死体を漁る人間や魔物も少なくない。鑄びていらない大振りのナイフなどは、

こここの住人からしたらお宝だろう。

この路地を引き返す頃には髪の毛一本も残つていない筈だ。飛び散つた血だけが乾

くだけで、人がいた痕跡は全て消え失せる。

それが、こんな路地裏で死ぬ、という事だ。

人一人殺したというのに、恭介の表情に動搖は無かつた。

対魔忍であつた頃から、対人の訓練も受けていたし、暗殺を請け負つた事も一度や二度じゃない。

そして社会情勢を鑑みれば、外道に堕ちた人間に掛ける情けなど一寸たりとも存在しない。

どんなに同情に値する理由があろうとも、その為に食い物にされる存在がいるのであれば、殺される覚悟は持つべきだ。

そうでなければ、自分の正体を露見するような真似はするべきではない。

氏素性がバレれば、それだけで自分の愛する者が害される可能性がある。

だからこそ、裏社会で番外騎士の名は有名だが、恭介の名は余り認知されていないのだ。

箸にも棒にも掛からぬ程度の<sup>プライベートアイ</sup>私立探偵。

その程度でいいのだ。

歩を進め、辿り着いたのは路地の一角。

客人となつた者にしか解らないサークルと飾りが揺れる場所。そこに、その悪魔はいた。

「——ようこそ、代行殿

サークルが現れ、出現する悪魔。

気取った様子で一礼する。

その上機嫌な様子に恭介は、

「おいおい、あんまし気取った真似はよしてくれ。俺らはただのビジネスパートナーだろ?」

「そう。お前さんはワシの依頼通りに魔導具を回収し、ワシに渡せばいい。それが『蛇の道』を使う条件だからな」

《蛇の道》。

世界の裏側に存在する抜け道であり、同世界の上であるのなら、様々な場所へ短期間で現れる事が出来る通路である。

ヴァルグリムら異界の商人が使用し、今は恭介も暫定的に使わせて貰っている《蛇の道》の使用には対価が必要だった。

元はヴァルグリムの顧客の一人から、依頼があつたのが発端だ。

彼は、とある魔術師が作成した魔導具のコレクターだった。しかし魔界や様々な異界に散逸したそれらを収集した彼は、人界にも魔導具が存在する事に気付いた。しかし彼は、そう易々と人界には降臨出来ない存在だ。

だからこそ、彼はヴァルグリムに依頼を出した。

ヴァルグリムは商人だ。同じ悪魔でも、彼やアンネローゼのメイドであるミチコに比べて脆弱だった。否、とは決して言えなかつたのだ。

それ故に、長命種の情報を求めてやつて来た恭介は正に渡りに船と言えた。

代行騎士。

四騎士に比べれば数枚は劣るが、しかし実力は折り紙付きだ。あの二人がそんな手抜きをする筈がない。

恭介が、何もない空間に手を伸ばすと、空中に波紋が生じ、腕が埋まつていく。インベントリと呼ばれる様々な物や武具が収納されている特殊な異空間である。

これも四騎士の力の一つだ。

その中から、何の用途に使うのか解らない道具を取り出すと、それをヴァルグリムに手渡した。

「つたく。かなり骨を折つたぞ。それ、新興宗教の御神体だつたんだからな」

とある国で生まれた新興宗教の御神体として祀られていたそれは、生贊を捧げることで所有者に異能の力を与える魔導具だった。

それ故に信者の多くは、家族や友人知人を生贊に捧げ、超人と化していたのである。故に、恭介は代行騎士シャドウとして——職務を全うした。

構成人数は千人を超えており、少数の例外を除いてほぼ総ての構成員が教主の後を追い、旅立つたのである。

「ふむ。まあその件は分かつておるよ。……そまさな、ワシもそれなりに信頼性の高い情報を仕入れた。それを対価としてやろう」

爪やアクセサリーをジヤラジヤラと鳴らしながら、ヴァルグリムは言った。  
【その創造者の通り名は、『黒い槌』だそうじや】

「……どつかで聞いた名前だな」

「そうじやろうよ。ワシら商人の方が馴染みが深い名じや。鍛治師としての腕は超一級での、品が市場に流れればかなりの額が動く。円でも、ドルでも、金品や宝石、果ては魂でも、な」

ふと、所持している一挺の銃を取り出す。

マーシーと呼ばれる大型回転拳銃のグリップには、その名が刻んであつた。

「これか？」

その銃を見て、しかしどアルグリムは言う。

「いいや。ソイツはコピーじゃ。あのウオーより力を借り受けた際に、ヤツの装備も複製されたのじやろう。それにそれは本来、ヤツの兄であるストライフの銃、その複製よ。複製の複製であるが故に、その性能は数段落ちる。見せぬ方が賢明じやろう」

氣性の荒い鍛冶師で、無礼を勧いた連中は悉く大槌の餌食となつたらしい。

「……で、居場所は？」

「アミダハラの地下に拠点をこさえとすると聞く。詳しい場所は判らぬが、お前さんが新たな魔導具を持つてくる頃には候補を幾つか上げておいてやろう」

「分かつた。次の魔導具の在処は？」

「独逸じや。あの国の諜報機関である連邦情報局に保管されておると聞く」

吉報を待つておるぞ。

そう言い残して、ヴァルグリムはサークルの中に消えていった。

「……ドイツ、か」

今迄は宗教団体や企業、個人を相手にしていたが、今回は国が相手となるようだ。

●  
「それで、今日は一体どうしたんだい？　騎士の坊や」

ノイはそう細い眼を恭介に向ける。

この老婦人は、恭介が代行騎士であると見抜いていたのである。

「ああ。なあ婆様、独逸の連邦情報局に伝手はないか?」

「……いきなりだねえ。一体全体どうしてだい?」

ヴァルグリムから手渡された対象の写真を見せながら、彼は言う。

「ナンバー5026を貰い受けたい」

その言葉に、ノイは首を傾げる。

暫く考え、思い出したように手を打つた。

「ああ、当局がガラクタと断定したアレだね。確かに交渉次第では譲ってくれるだろうけど、まだどうしてだい?」

「……あー、まあ、その……熱心なコレクターがいてな。ソイツが欲しがってる」

「それが創造者を見つける条件かい?」

「まあ、そんなところ」

「ふーむ……」

ちよつと待つてなさい。

そう言い残してノイは店の奥へと消えていった。

三十分程度で戻ってきた彼女は、

「条件次第で向こうは譲つてもいいって話だよ」

そう恭介に言うではないか。

「マジか」

余り期待していなかつた恭介だが、思わぬ展開に脳裏で警鐘が鳴つた。

こういう時、公的諜報機関はかなり厄介な案件に巻き込もうとするのを嫌と言うほど知つていたからだ。対魔忍時代、嫌と言う程味わつた。

しかし、肯定しなければ目的の品は寄越さないだろう。

如何にゴミであろうとも、その調査には少なくない力ネが掛かつてゐる。

どうにかして利益に繋げたいのが人情と言うものだろう。

「……で、その条件つてのは？」

嫌そうな顔を隠しもせず、しかし諦めた様子の恭介へノイはあつさりと告げた。

「アミダハラを拠点にしてゐる独逸秘密研究機関『アーネンエルベ』元・研究員、魔術師バルド・バルドの暗殺。その手伝いをして欲しい、だとさ」

「——は？」

そしてこれより、事態は動く。

陸郎は、兄を探しにやつてきた少女と出逢い。

恭介は、独逸より来る魔女の手伝いを。

そして棘持つ美女たちは、人狼と呼ばれる怪物に遭遇する。

「ところで、そのコレクターってのはどんな人だい？」

「んー……知人が言うには、バッドエンドよりもハッピーエンドが好きな変り者って話  
だけど」